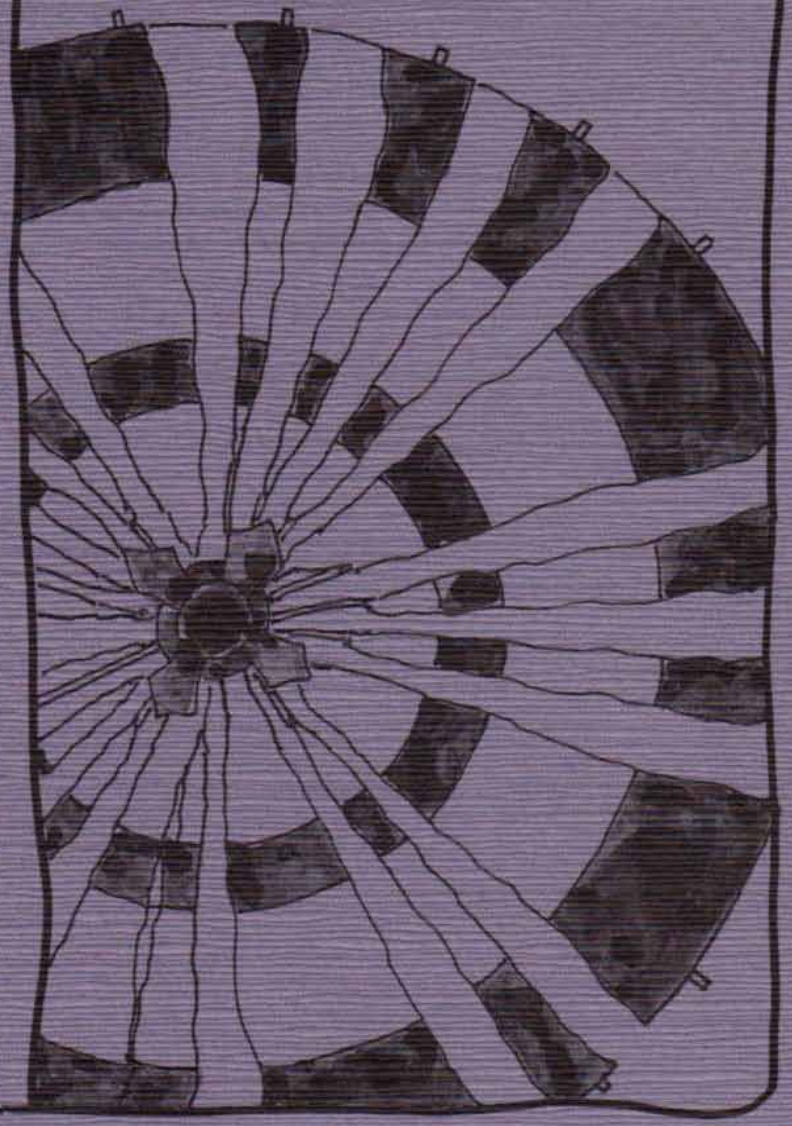
やぶれ傘

一三二号
二〇一三年六月



抄集句傘れぶや

選夫紀崎大

そこいらの草をちぎつて打つ草矢　根橋宏次
噴水のそばへ行かうと立ち上がる　大島英昭
囓りたる苺の中は白かつた　きくちきみえ
蕎麦食いに行く畦道の夏あざみ　青谷小枝
背番号付けて走る子春夕焼　廣瀬雅男
サングラス掛けて家人は女子会へ　丑久保勲
犬と子が鯉を眺めてゐる五月　小山よる
花虻の羽音如雨露に水を汲む　安藤久美子
二葉亭四迷の忌なり新茶汲む　瀬島酒望
田一枚ごとにくつきり畦塗られ　渡邊孝彦
蠍座赫しほととぎす闇に啼き　藤井美晴
風鈴をつれば川風きたりけり　白石正躬
校庭のフェンスに絡む炎花　天野美登里
豆飯や母の小言のなつかしく　秋山信行
雨粒を転がすやうに鉄線花　有賀昌子

吹きだまる花びら踏んで春惜しむ　高橋宜治
桑の実の枝をゆるりと引き寄せて　中島和子
新緑にそまるガラスのレストラン　貫井照子
花曇からくり時計正午指す　野口希代志
春野菜泥付きのまま持ち込まれ　広瀬　済
雨粒がしたたり落ちる藤の花　箕田健生
風光る行くはハーレーダビットソン　村田　武
青き踏む歩幅それぞれ土手を行く　山本久枝
花筵少し離れてキッチンカー　吉田幸恵
菜の花の黄色だらけの日暮れかな　泉　一九
雨音の繁くなりたる柿若葉　岩藤礼子
山独活の葉先の見えるリュックかな　江口恵子
春嵐庭のみどりをかきまぜて　奥田温子
日の暮れの近づく畑の葱坊主　木村瑞枝
春の夜の余震ラジオのビートルズ　倉澤節子

火事跡もはやひと月に春の暮　柴﨑和男

初音して国会中継すぐに消す

菜種梅雨日暮るる神田神保町

夕刊フジ一部買ひたり朧の夜

街薄暑奥歯の麻酔まだ覚めず

抜かざりし筍ぐんと伸びてをり

はらわたはこの朝風や鯉のぼり

流れゆく水にまかせて花筏　高橋　均

花疲れ京浜東北蒲田行き

カレンダー破る音して四月くる

一輪の椿ぽとりと落ちにけり

助手席は無口となりぬ目借時

思ひきり眠つたあとのしじみ汁

ぼうたんの花のとなりのつぼみかな

吹きだまる花びら踏んで春惜しむ　高橋宜治

春はやて花びら飛んで空目指す

ボンボンと柱時計や春の宵

ビル群の窓に映りし春の虹

健やかに育て我が孫武者人形

渓流の音も新しき緑夜かな

食卓に磯の香運びくる飽

幟には「食べ放題」と風光る　竹内文夫

真四角のビルの真上の春の月

影がやや短くなりて三月尽

飛行機雲二筋がゆく春夕焼

箸置を配る幼子まめご飯

さざなみを過る鳥影田植前

鬼籍に入る片桐夕子忘れ霜

中島和子

起きぬけの水なまぬるき立夏かな
水筒をたぷたぷ鳴らし子供の日
古火鉢に三代目かの目高飼う
とりあへず目高を放す金盥
農園の風にじやがたら花盛り
桑の実の枝をゆるりと引き寄せて
ぼうたんのかすかに揺るる真昼どき

貫井照子

草青む紙飛行機に名をつけて
敷石の間を花の屑がうめ
ふんじやだめお空の色のいぬふぐり
やはらかき風は湖より芝桜
葱坊主五列ならんで風の中
藤の香や花かんざしの巫女の舞
新緑にそまるガラスのレストラン

野口希代志

花のなき古木に一羽春の鳥
花曇からくり時計正午指す
レガッタの掛け声聞こゆ昼餉時
藤棚の下でランチの傘寿かな
公園のペンキ塗りたて若葉風
今年竹皮付けしまま空へ伸ぶ
窓際の一人ランチや新樹光

萩原渓人

雪洞の灯りてさくら吹雪かな
揚雲雀川の流れは淀みなく
たんぽぽの綿毛が飛んでゐる野点
物置の中から農具だす遅日
苜蓿池の向うに牛五頭
谷川のせせらぎ渡る花楤
花弁のうへにはなびら牡丹散る

萩原久代

おしやべりのつづくベンチに花吹雪
北の大地に「ありがとう」卒業子
春風に乗つて自活の道ゆく子
薔薇園の香りの届く友の店
草藤の巻ひげ伸びる伸び盛り
マンションの窓辺にゆれる鯉のぼり
颯爽とゆくのは友のサングラス

濱野新

街川の堰にきてゐる花筏
鴨川に足浸ける子らこどもの日
遅桜小学校の庭沿ひに
さういへば奴どうしてる昭和の日
薫る風腹いつぱいに鯉幟
茶を淹れて三時のおやつ柏餅
公園にシートを敷いてピクニック

広瀬済

花冷えやサランラップの端探す
湯を注ぐだけの昼食竹の秋
囀りの林道を行くゆつくりと
雨の日の早くも咲いて額の花
春野菜泥付きのまま持ち込まれ
柳絮飛ぶ公民館に続く道
理学部の小池近くにリリー咲く

増田裕司

幼子も年長組へ古希の春
熱々の白米飯に桜蝦
蛤の殻模様よしもう一献
葉桜や友の訃報が朝届く
川をくる風をはらみて鯉のぼり
春時雨あがりし道を路線バス
湯治場の蕎麦屋にシニア集う春

湯引きして鱗逆立つ桜鯛
呼ばれしと後ろを見れば桜散る
花の下ボール蹴りあふ老夫婦
今年また大樹の許にいちりん草
いういうと青鷺歩む雨の原
著莪の花日蔭の庭にすぐ増えて
結局は吊る所なきハンモック

道林はる子

春竜胆ひそかに咲きし庭の隅
石楠花の赤き花びら散りにけり
雨粒がしたたり落ちる藤の花
黄砂去りひときは青き空ひろがる
緑陰に集ふ小鳩の三四羽
亡き妻の遺影に供へ笹団子
異国語が飛び交ふ初夏の時の鐘

箕田健生

先頭は傘ひらきけり春しぐれ
この坂の彼方は知らず夕桜
年とらぬ老人ばかり四月馬鹿
つかのまの茶柱なりし春の雪
川風のきらきら過ぎる桜土手
ふりむいていく人のあり遅桜
診察の小さき枕鳥ぐもり

武藤節子

水芭蕉を玄関先に咲かす家
「喫茶店」てふ名の店や木の芽風
遠目には辛夷かに見ゆ白木蓮
風光る行くはハーレーダビットソン
葉桜やからすはやはり真つ黒け
川に出る河原のこみち花茨
風薫る孫運転のハイウエイ

村田武

森美佐子

柿芽吹き取り壊されし角の家
満開の桜通りを往復す
花冷の土曜の午後の雨もよひ
囀りや御苑入り口賑はひて
玄関に蜥蜴あらはる午後の二時
公園のなんじやもんじやの花満ちる
裏に咲くつつじを手折り瓶に挿す

山本久枝

青き踏む歩幅それぞれ土手を行く
寄せて引く波音がばとさくら貝
バス停をひとつ目でおり目借時
鳥よけのネットに透けるサクランボ
やぶれ傘学者の住みし家といふ
温度差の身にこたへたる木の芽時
遠足の貸切りバスに看護生

湯本正友

春埃柱時計にうつすらと
菜園を初蝶ひらりひらり来る
畔に咲く菜花を摘んでお浸しに
波どつとくれば舟虫さつと散り
街路樹の欅の芽吹き枝に鳥
ふらと来て何処かに去りし揚羽蝶
玄関のポーチのすみに柴桜

吉田幸恵

花筵少し離れてキッチンカー
綿菓子の方へ桜が散つてくる
暮れ残る光の中の山桜
春耕の真中に墓とトラクター
史料館の屋根は茅葺風光る
平林寺を五千歩あるき心太
真青なる空に広がり柿若葉

花過ぎの木陰に暫しうとうとと　脇村碧

竹の秋平たい土によろめいて

行く春の川に大鯉跳ねてゐる

うろ覚への道ゆくときの夕蛙

夏蝶の横切つてゆくだらだら坂

読みかけの本を手提げへ夕薄暑

いつ来ても青信号の青田道

春帽子どつと電車に乗り込み来　浅嶋肇

春の雨傘傾げればこぼれけり

校庭に桜蕊降る昼下がり

牡丹園を通り過ぎたる日照り雨

左と見(み)右(こう)見(み)牡丹の花に見入りけり

たんぽぽの絮やつてくる母の墓

腕時計のバンド弛める立夏かな

◇7月・8月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
7月	4日(火)	AM9：00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	4日(火)	PM6：00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	5日(水)	PM6：00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保　勲
	7日(金)	AM10：00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	7日(金)	PM6：00	なごみ会	浦和コミセン1	秋山信行
	15日(土)	PM2：00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	22日(土)	AM10：00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
	22日(土)	PM2：00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
8月	1日(火)	AM9：00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	1日(火)	PM6：00	うらら会	浦和コミセン8	大島英昭
	4日(金)	AM10：00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日(金)	PM6：00	なごみ会	下落合コミセン1	秋山信行
	7日(月)	PM6：00	ぎんなん会	浦和コミセン8	丑久保　勲
	19日(土)	PM2：00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	20日(日)	AM10：00	吟行会(下記注)	武蔵浦和コミセン2	丑久保　勲
	26日(土)	AM10：00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
	26日(土)	PM2：00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。
8月4日（金）の下落合コミセン。JR京浜東北線「与野」駅徒歩2分。
直前に改めて案内します。
8月20日（日）の吟行。
集　合　10時、JR北浦和駅改札口。
吟行地　見沼・浦和西高の裏側。
句会場　武蔵浦和コミセン2。

◎連絡先
秋山信行　☎048-874-0555
大島英昭　☎048-592-5041
廣瀬雅男　☎048-443-7522
藤井美晴　☎0422-55-2733
WEP編集室　☎03-5368-1870
丑久保　勲　☎048-853-3856